

見直される地域と歴史の絆 「ソーシャル・キャピタル」の観点から

講師＝大守隆 吉備津彦神社社家(大藤内)第79代当主 現在APCA経済委員会議長
平成21年5月30日 古代先史研究会(於備前市)

1. 時代の変わり目の可能性

グローバリゼーションは不可避だが

産業革命以来の方向が転換している可能性

生産と生活の分離、規模の経済、匿名性の増大

何故か？

技術の変化：情報化の進展、PCの発達、

価値観の変化：所得の増加、労働時間の減少、人間観の変化（損得からの離脱）

安定性志向：不況の反省

2. 世界的に注目を浴びる「ソーシャル・キャピタル」

道路、港湾、空港などの社会資本ではない。キーワードは、一般的信頼、ネットワーク、互酬性、帰属意識など
社会がまともに機能する基盤（会社組織でもそう）

米 国：古き良きアメリカへのノスタルジー、「一人でボーリング」、家族の崩壊

欧 州：疎外された移民

途上国：最新技術の消化には社会的背景が必要

さらに最近では、地域活性化、技術革新（クラスター）との関係が重視されている。

3. 日本での見直しの背景：昔はこの面で豊かだったが・・・

国際化：カネや技術の国際化が進む。日本らしさとして残るものは何か？

高齢化：高齢者は生産には直接寄与しないが、

ソーシャル・キャピタルの面で貢献する可能性（江戸時代はご隠居社会）

不況：会社への帰属意識の弱まり

4. ソーシャル・キャピタルと地域・歴史

①市場と規制の組み合わせ（欧米流経済学の発想）しかし、

規制当局は時代に遅れる

技術革新のため、個人の利益と社会の利益が大きく乖離する「機会」が生じた

②. 社旗の成熟

人は損得を基準に生きるのではないし、そのように考えて社会システムを設計すべきでもない。

③. ソーシャル・キャピタル

行動基準の形成に大きく影響

④. 地域クラスター

革新的な技術の発展の基礎は、意図的に形成された研究者集団ではなく

地域的な勉強会のようなソフトな組織

高齢者の役割、暗黙知（失敗の経験）、仲間による刺激とヒント

相互信頼（と監視）による自由な情報交換、

⑤. 文化の価値の見直し

モノへの需要への充足 文化の元をたどると地域と歴史 共生概念の変化 背景には自然（入会地、里山、
鎮守の森、神様）の変化 防災、防犯、子育て、介護

⑥地域特性の変化は何か？

自然とソーシャル・キャピタルと伝統の3つではないか？ 経歴とSCの資料を付けよう 具体的な提言が欲しい

い

大守氏講演内容

皆様こんにちは。ご紹介にあずかりました大守 隆と申します。今日、私は若狭先生の前座を務めさせていただくことになりました。どのようなテーマでお話するのがいいかということを考えていましたが、私は今、APEC の関係の仕事をしておりまして、そこで日頃考えていることと今回の研究会との接点のようなテーマをお話させていただきたいと思っております。

レジュメを前にお配りしておりますけれども、それに入る前に、まず、APEC とは何かということについて、やや大袈裟な話になったり、宣伝にもなったりしてしまうかも知れませんが、お話をさせていただきたいと思います。APEC とはアジア太平洋経済協力のことです。太平洋をとりまく国々、国という差し障りがある場合には、「経済」という言葉を使いますが、それが21個参加しているものです。21とはどこどこなのかについてまずご説明しますと、日本、中国、韓国、台湾、香港、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ブルネイ、シンガポール、ベトナム、パプアニューギニア、ここまでが太平洋のアジア側、それに加えて、オーストラリア、ニュージーランドそして、ロシア。太平洋の向こう側では、カナダ、アメリカ、メキシコ、ペルー、チリ、これで21になります。これが集まって、色々な議論をすると、そういういわば国際機関のような協議体でございます。

APEC の一つの特徴は、毎年持ち回りで議論をするということで、今年はシンガポールで一連の会議をやります。そして来年は日本でやることになっております。どんな議論をするかということですが、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが「ボゴール宣言」というのが大分昔に出ました。その中に、アジア太平洋地域で貿易や投資の自由化をしましようという目標が書いてあります、そして、先進国にとってその自由化の目標年は2010年であるということも書いてあります。途上国はもうちょっとと後ですが、日本でAPEC が開かれる来年は、先進国の自由化の目標年ということで、大きな節目の年です。これから先、我々はこの地域をどういう方向をめざしていくべきか、ということを経年打ち出さなくてはいけないということです。

ご存知かもしれませんがつい最近、来年の首脳会議は横浜でやる、といったように、開催場所についての情報が発表されました。さて、問題は場所より中身のわけですが、ここから先は私個人の考えも含めてお話を進めさせていただきたいと思っております。今、外務省や経済産業省などと議論を始めているわけですが、新しい方向性を日本がアジアをバックにして打ち出す、そういう時期にきているのではないかと思います。まだ模索の段階ではありますが、1つ考えられる方向としては、最近、大きな不況、100年に1度の危機と言われていた深刻な危機がありましたが、そういうことの反省も踏まえなくてはいけないと思っております。しかしより長い目で見ると、アジア太平洋の地域というのは、急速に貿易も増えてきて、お互いにそのメリットを享受するような形で発展してきたと、そういう面も積極的に評価していかなければならないと思っております。しかし、国際化が進む中で、海外要因の影響がだんだんと重要になってきたという側面もあります。特に多くの国にとって今回の不況というのは海外から来ています。国際化のメリットをいかに国民全体が享受し、一方で、海外から来るショックの悪影響を緩和していくか、ということが一つの大きな課題であると思っております。

こうした問題意識の中からインクルーシブ・グロースという概念を主張する人もいます。これは、発展に取り残される人々を作ってはいけないという発想です。そこはもちろん重要なのですが、私個人は、もう少し前向きなイメージが欲しいなと思っております。すなわち単に成長や国際化の成果をどう配分するかといった問題の捉え方だけでなく、しっかりした成長を実現したり、国際分業のメリットを享受しやすくしたりするためにも、社会全体で発展していくことが重要ではないかという側面も強調していく必要があると思っております。これと密接な関係があるのが、最近、世界で注目されている「ソーシャル・キャピタル」という新しい概念です。今日はそのことについても詳しくお話をさせていただこうと思っております。一ツ橋大学の名誉教授の宮川公男先生という方と私の共編で「ソーシャル・キャピタル」という本を東洋経済新報社から2004年に出しました。その時に、東洋経済新報社の引退間際の社員の方が、最後の仕事として利益を度外視して良い仕事をしたいというお考えで事務方を引き受けてくださりました。ところが、幸いなこの本は地味な内容にもかかわらず予想以上によく売れました。時代の流れがこういう方向に向かっていることを示唆しているように思っています。このソーシャル・キャピタルというのは、今日のテーマの「地域と歴史の絆」というのと、かなり密接な関係があると思っております。

それでは、レジュメに則してお話したいと思います。

少し大袈裟な表現ですけれども、我々は時代の非常に大きな変わり目にいるのではないかと気がしております。今回の経済危機は、よく100年に1度と言われておりますけれども、100年に1度ではなく、もっと大きな意味での時代の変わり目にいる可能性があるのではないかと思います。別の言い方をしますと、金融危機というの、何年かすると次第に収まってくると思っています。もう既に少し収まり始めている兆候が見えておりますけれども、それにあまり目を

奪われてはいけなくて、もっと大きな時代の転換が起きているのではないかということです。それはどういうことか、そして、いつ以来なのかといいますと、産業革命以来ずっと続いてきた方向が逆転し始めたのではないかと思います。具体的にはレジユメに3つほど書いてございます。1つめは、生産と生活の分離というのが産業革命以来のトレンドであったのが逆方向に向かい始めた。ということです。昔は、生産の場が家庭の中にありました、今でもアジアの一部の地域に行きますとそうなのですが、家庭の中で鶏とか犬とか豚とか一緒に暮らしており、食糧生産が家庭の中で行われています。工業も産業革命以前は家庭内で手工業の形で営まれることが多かった。それが、大規模生産の時代になり、生産は工場で行われるようになり、だんだんと生活の場から分離されてくるようになった。そういう方向がずっと続いて発展してきたのですが、最近になって、生産活動が必ずしも場所を選ばなくなった。小さなオフィスやホームオフィス、あるいは自然豊かなところでも仕事ができるようになってきているというようなことが起きております。その背景には「規模の経済」の追求が一段落したことがあると思います。規模の経済というのは経済学の概念で、要するにモノは大規模生産の方が安くできるから、大きな工場を建てて、そこで作るのが良いという考え方です。この流れが止まって、今は小規模、多品種で生産した方が良いのではないかという考えも強まりつつあります。

これと似た話ですが、アジアの他の国と違って、日本では世界一、アジア一といったことがもてはやされた時代が20年前くらいに終わってしまいました。世界一高い電波塔とか、世界一速い鉄道とかを競うことをしなくなりました。その代わり、いかに質の良い物やサービスを提供するかという方向に変わってきているのではないかと思います。3つめの点も、上の二つと関係しています。これまでは匿名性がずっと追求されてきました。誰がやっても同じようにできるようなマニュアルが求められてきました。そして、大都会の中で知らない人の中で生活する人も増えてきました。こうした中で経済活動は盛んになってきたわけですが、最近はその方向が逆転し始めました。すなわち、個性が重視され、誰が作っているかが問題にされるようになってきました。農産物でも、作られた方の名前が入っているものの方が良く売れるようになりました。しかしこの流れは一体、どこに行き着くのかはわかりません。

次にこうした転換の背景を考察してみましょう。1つは技術の変化で、通信技術が発達したり、輸送費が他の費用に比べて安くなったりしたために、必ずしも物理的に近くにいなくても情報やお金のやり取りなど色々なことができるようになったことがあげられます。

これに加えて、需要側の変化も重要だと思います。すなわち、人々が豊かになり、価値観も変わってきて、モノに対する需要よりもサービスや文化への需要が重視されるようになってきました。一方で、人による差はありますが平均的には労働時間が減少してきました。余暇が大分増えてきて人生を充実させるために使える時間が増えてきたということも背景にあると思います。さらに言えば、安定性への志向が強まったことも挙げられます。不況の反省ももちろんありますが、豊かになった分だけ、落ち着いて地に足をつけた形で仕事をしたいという気持ちが強くなったと思います。また、高収入を求めて働くよりも、何か意味のある仕事をすべきではないかといった考え方が強まってきたといえると思います。

こうした中で、伝統的な経済学も反省を迫られています。伝統的な経済学というのは、ある意味で単純な人間観を前提としています。これは経済学者の人間理解が浅かったというよりも、そういう前提を置かないと理論が構築しにくいといった理由の方が重要だったと思います。ひと事で言うと「損得」を基準として人間行動を説明しようとしてきました。でも、どうもそうではないのではないかと。とこういうことを見直されてきているわけです。私どもの日頃の行いや、親から受けた躾などを考えてみてもやはり基本は損得ではなくて善悪であったと思います。ある行動をするべきかどうかを判断する際の基準は、それが良いかどうか、という善し悪し、あるいは美しいかどうかであって、損得ではないと思います。

最近の発達した経済学では、ゲーム理論という分野があって、人間行動をもう少し複雑に、あるいは長い目で見るとなりました。行動を説明する際に相手の反応や相手からの信頼を勘案するということです。しかし、この発達の基本はやはり損得です。あえて言えば打算あり、その観点が長期化したにすぎないと思います。私は、こうしたアプローチには疑問を感じています。人々の行動の基準は、社会の一員であるということに根付いているのではないかと思います。そこで、いよいよ今日のメインテーマの一つであるソーシャル・キャピタルの話に入っていきます。

まず、ソーシャル・キャピタルとは何のことかをご説明します。昔から日本には社会資本という言葉がありますが、これはそれとはちょっと違うので、誤解を招きやすいのです。実は中国では、社会資本という言葉を使っているのですが、日本では二つの言葉は区別しています。どう違うかと言うと社会資本とは、道路とか公安とか空港などの公共事業の対象になるようなものです。それに対してカタカナで言うソーシャル・キャピタルというのはもっと人間くさいものであって、「信頼」、「ネットワーク」、「互酬性」、「帰属意識」などのキーワードで説明されるものです。

まず「信頼」についてご説明しましょう。レジメには一般的な信頼と書いてありますが、一般的なというのが付くのはどうしてかと言いますと、例えば大学の同窓やクラスメートだった相手を信頼するというのは一般的な信頼とは考えません。それは同級生だから信用できるというように根拠のある信頼であるからです。では一般的な信頼とは具体的にどのようなものかと言いますと、特に繋がり無しの人に対する信頼です。例えば、たまたま道ですれ違った人、あるいはたまたま電車で隣に座っていた人に対する信頼です。もし電車に乗っている際に、何か事故があったとしましょう。そのときに隣に座っていた人と協力して問題を解決していくような信頼の基盤がどのくらいあるか。ということです。もちろんお互い知らない間柄ですけども、その社会の中で培われている基礎的な信頼感がどの程度あるかを問題にしているのです。この意味での信頼の度合いはかなり国によって違います。海外の論文に極端な調査を行ったものがあります。お財布の中に100ドル程度、1万円くらいのお金と連絡先がわかるものを入れて、一定数を町中にわざと落としします。そしてそのうち何個の財布が戻ってくるのかというのを国によって実験をするわけです。そうすると、結果は国によってかなり違って、北欧諸国ではかなりしっかり戻ってくるという結果になりました。そして、そういう国では一般的な信頼が高いとか、さらに経済成長率も高いという議論がされています。

もう一つのキーワードは「ネットワーク」です。これは、人がどれくらい、どのようなネットワークに入っているかということです。しかしなかなか計測が難しい側面もあります。ネットワークにはいろいろなものがあるからです。趣味のネットワークもありますし、付き合いや義理で入っているネットワークもあります。さらに、会員といっても、どこかの店のポイント会員というのも一応会員です。どれだけ縁のあるネットワークに入っているかというのは、なかなか把握するのが難しいのです。また、そうしたネットワークでどれだけ活発に活動しているか、いわば濃度も重要ですが、これも簡単には計測できません。しかし、義理で始めた付き合いでもそこから縁が生まれることもあるのは皆様もご存知のとおりです。

それから「互酬性（ごしゅうせい）」ということもよく言われます。互酬性と言うのは難しい言葉で、お互いに協力しようという意味なのですが、単に貸し借りというのとはちょっと違います。短期的な貸し借りですぐにお返ししたり期待したりするというよりは、そのネットワークに入っていれば長期的には自分も裨益するという程度の緩い意味で、また長期的な意味での互酬性です。

次は、「帰属意識」です。グループまたは社会の一員としての意識です。社会というのは、国の場合もありますし地域社会の場合もありますし、企業の場合もありますし、趣味のサークルの場合もありますけど、そういうものに対する帰属意識がどれくらいあるか。ということです。このように、ソーシャル・キャピタルに関する代表的なキーワードを見てきましたが、こうしたことが、社会がまともに機能する基盤として重要なのではないかということでこの概念が世界的に注目を浴びているわけです。

別の観点からソーシャル・キャピタルを説明してみましよう。会社の例を考えてみてください。従来、経済学では、生産水準というのは、生産要素の投入量に依存すると考えてきました。生産要素とは労働や資本や技術です。どれだけの人材がいるか、機械がどれだけあるか、技術水準がどれだけ高いかということで生産水準が決まると考えてきたのです。しかし、組織で働いた経験のある方なら、大事なのはそういうこともあるけれどもやっぱりチームワークではないかとすぐに思い浮かぶと思います。いくら優秀な人材が揃っていても、みんながお互いに協力的でないような組織、あるいはうまく運営されていないような組織では、折角の優秀な人材も腐ってしまう。皆がやる気を出して協力すれば、生産性が何倍も違ってくるのです。これと同じことが社会全体についても言えるのではないかということです。

ここで少し海外の話をしたいと思います。先ほど世界的にソーシャルキャピタルの議論が盛んになってきたということをお話ししましたが、その背景は実は地域によって違ってきます。まずアメリカです。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんがパットナムという人が「一人でボーリングをする」という本を書いて、これが大変有名になりました。アメリカでは、昔は地域にボーリングのグループがあって、皆で楽しく行ったのだけでも、最近は一りでボーリングをしに行く人が増えてきているということを探り上げた本です。古き良き時代のアメリカが崩れてきている。そういう警告の書であったわけです。その背景には、家族や地域社会の崩壊やテレビの影響といった議論がなされているわけです。一方、ヨーロッパでソーシャル・キャピタルが議論されている背景には、移民の問題があります。例えば、イギリスの北の方に行きますと南アジア系の移民の人たちがまとまって暮らしている地域があります。相当所得水準が低くて、若い人が希望を持たず、生き甲斐を失っていて、犯罪のリスクも高いという、憂慮すべき状態になっていました。そういう人達をどうやって、社会の中に受け入れて行くかが課題になっています。生き甲斐を持って前向きに暮らしてもらうにはどうすればいいかということが、政治的にも大きな問題になってきました。こうしたことから、イギリスやフィンランドは、統計指標の面でもソーシャルキャピタルを非常に重視しています。

もう1つは途上国です。世界銀行という国際機関がこの分野の研究をリードしています。その問題意識はどうかとといいますと、途上国に一生懸命援助しても、どうも身に付かない場合が少なくないということがわかってきたことがあげられます。

その背景をよく調べてみますと、最新鋭の技術をもった設備を導入してあげても、それが必ずしもうまく運営されない。運営するためには、例えば地域社会内部の協力が必要です。すなわち、お互いに分担体制を組んで、自分の分担をちゃんとやる、といったように、導入された設備を使う側の体制が整ってないと、いくら良い技術であってもそれを消化できないということがかなりわかってきました。

この場合、2つ道があります。一つは、そういう最先端の技術ではなくて、もうちょっとその地域に適した技術、すなわち使い易い技術を移転する方がいいという議論があります。例えば井戸掘りの技術です。人もう一つは、社会の方に働きかけて新しい設備でも運営のできるような社会に変えて行ったほうがいいのではないかという道です。こうしたことを巡って研究が進められています。

今度の経済危機で貧困と言われる人が増えており、社会全体で助け合っていくことの必要性が増しています。これは、特にアジアの国でも非常に大きなテーマになっています。最初に申し上げた APEC でも経済発展のための社会的基盤といったようなテーマを新しい方向性として考えるべきではないかという議論が盛んになっていっています。また、最近では、ソーシャル・キャピタルと、地域の活性化や技術革新といったものとの関係が世界的に注目されています。地域の活性化という観点では、活性化している地域について、何故うまくいっているか調べてみますと、良いリーダーがいるわけですね。しかもリーダーが1人でやっているわけではなくて、まわりに理解者がいて、これは行政も含めてですが、そういう中でリーダーが十分に活躍をしている。そして自発性を重視した開放的なグループがあることも重要です。開放的ということが1つの重要なポイントでありまして、排他的なグループだとメンバー同士のコミュニケーションはあるのですが、社会の中での発展性に乏しくなってしまうのです。開放的で、来るものは拒まず、そして仲間の多様性も尊重しながら発展するグループの方が発展的であるということなのです。それからもう1つは何らかの地域特性を背景としているもの。そういう集団が地域活性化にとって非常に重要だということがわかってきたのです。技術革新について、これもいろいろな例がありますが、地域から出てくる技術も、あるいは企業で開発された技術でも、開発のために意図的に形成された研究集団から生まれたものもありますが、サークルとか勉強会といったようなよりソフトなもの、いわば「場」から生まれたものが多いことがわかってきました。

例えば、大企業で、こういうものを開発するからといって、スタッフを集めてみてもなかなかすぐに画期的な商品が出てこない。どういう所から出て来るかというサロンみたいな場から出てくることが多い。サロンには高齢者がいて色々な幅広い経験を持っている。経験の中で大事なものは試行錯誤して失敗した記憶・経験なのです。成功の経験は記録されますが、失敗の経験は記録されず、携わった人の頭の中にしかないことが多いからです。

ところが、かつては失敗した試みであっても、状況が変わっていることもあるのです。技術が新しくできたりして、昔ぶつかった壁も今は崩れているかもしれないのです。そうした点に関するヒントが得られたり、また志を同じくする仲間がいたりすることによって、やる気が出てくる。そういうようなことが非常に重要であることがわかってきたのです。「場」のもう一つの重要な機能は、準秘密情報の交換と育成です。相互信頼がありますと、これが可能になります。どういうことかといいますと、新しいアイデアを持っている人というのは、そのアイデアを何とかして実用化したいと思っている一方で、せっかくのアイデアを人に取られてしまうのではないかということも心配しているのです。ところがサークルというような相互信頼がある場では、何人もの人が情報を共有します。すなわち何月何日にこの人がこういうアイデアを皆さんに提供したということがわかっていると、やはりそう簡単に横取りして行くということにはならない。一人が出したアイデアを皆で育てたり、あるいは別の人のアイデアと組み合わせ、芽を伸ばしたりしていきける。そういうことなのです。

さて、日本についてはどうでしょうか？ 日本でもこうしたことが最近かなり注目を浴びてきています。昔の日本では地域のネットワークというのは非常に濃密で豊かだったのですが、都市化や国際化の進展の中で、それが希薄化してきました。こうした中で、日本らしさとして何を残せるかということが問題になってきています。しかし、最近新しい動きも感じられるようになりました。まず、人口が高齢化していきますと、これ以上、ベビーブーム世代が大都市に向かって動くということが終わってきます。そして職場から卒業した高齢者が地域でどのような役割を果たしていくのかということが大きなテーマになってきました。人口の高齢化に対する従来の考え方はかなり消極的なものだったと思います。つまり65歳以上の方々の人口に占める比率が何パーセントかを問題にして、それが上がっていくから日本の産業の活力は下がってくるなどといった論調が新聞などで盛んに展開されてきました。私はもうちょっと積極的な評価もできるのではないかと考えています。

それは端的に言えば、ご隠居社会ということです。これは日本の江戸時代にあったわけで、狭義の仕事からは引退するけれども社会的な活動、例えば地域の運営の活動はかなり一生懸命やられていました。また、文化活動も相当積極的にやられて、そういうことが江戸時代の日本の社会の安定性や文化的な豊かさに大きく寄与していた可能性があると思います。今の日本で、そういう芽がどのくらいあるか、と考えますと、潜在的にはかなりあると思います。問題はそれが開花するための場所やきっかけをこの辺で考えて行く必要があるのではないかということだと思います。

それでは、ソーシャル・キャピタルと地域や歴史との関わりを考えてみたいと思います。日本でのソーシャル・キャピタルは昔はかなり豊かなものがあつたのですが、今ではかなり限定的なものになってしまった。普段の人との付き合いはどんなことをしておられますか、と聞きますと、ここにおられる皆様は違うかもしれませんが、大都市ですと、1つは会社の中での仕事が終わってから飲みに行くような付き合いの比重が多いと思います。しかし最近では会社もだんだん厳しくなっていていつ左前になるかわからない。或は、リストラされてしまうかわからない。という状況になっています。また、会社の中でも正社員と非正規社員といったような、違いが出てきています。会社に対する帰属意識というの、弱まっているのではないかと思います。

もう1つ、日本のソーシャル・キャピタルの大きな要素は子育てを通じるネットワークだと思います。これは今でも比較的健在でありまして、公園デビューという言葉が象徴的です。すなわち子供が育つてきてある日お母さんが公園へ連れてって、お母さんがお母さん同士のネットワークに入っていくのです。そして、小学校が始まりますとPTAとうより制度的なつながりが出来て行きます。しかし、生活環境の都市化が進んだり、私立学校が増えたりしていることもあって、子供達は昔のように帰ってきてランドセルを放り出してすぐ遊びに行くといったような濃密なネットワークは持ちにくくなっています。したがって地域の子供同士、子供を持つ人同士のネットワークは昔に比べれば多少弱体化してきています。

もっと昔を考えますと、かつては自然がソーシャル・キャピタルの背景として非常に重要な役割を果たしていたと思います。すなわち自然環境に大きく左右される農林業に必要な共同作業が強力な接着剤の役割を果たしていました。入会地があつて、そこを管理するルールが整備されていました。こうした動きは明治の半ばに一番盛んであつたようです。しっかりしたルールで、きちっと管理されていたようで、里山についても同様で、地域社会によって適切な管理がなされていました。しかし最近では非常に荒廃が進んでしまいました。私は自由貿易推進論者ですが、林業はグローバルゼーションの最大の被害者だという印象は持っております。そしてさらに、「鎮守の森」というのがあつて、そこに神様がいて、その神様は先祖代々みんなと一緒にお祭りをしてきたものでありました。これが共同体意識の要のような役割を果たしていたと思います。しかし時代が変わって、最近の都会では、農業活動や里山維持などの代わりに、防災、子育て、老人の介護等がソーシャル・キャピタルを支える主な要因になってきたと思います。

全体としてみれば、こうした変化はどちらかというところソーシャル・キャピタルを弱体化させる方向に作用すると思います。しかし最近になって文化とか伝統というのが新しい要因として再び重視されてきているのではないかと思います。そして文化の元を辿っていくと地域に根ざしたものがあつて歴史と関係がでてきます。地域の人々は歴史と文化を共有していて、その中から新しい産業の芽が出て来ることもあります。また伝統的な祭りも、再び注目を集めております。例えば大阪のだんじり祭りに関して行政が有識者を集めて研究会を作つたとのことですが、

また、私がAPECの前にやっていた仕事を通じて認識を新たにすることがあります。日本に投資をしている海外の投資家を訪ねて行って日本経済に関して説明をする仕事をしていたのですが、そうした投資家の方々が何故、日本に投資をしているかということです。もちろん、日本担当ということですから、日本人がそうした仕事をされている場合もありますが、そうでない方が、何故、日本関係の投資業務をしているかということです。私の印象では、日本の魅力、特に文化の魅力が大きいと思います。日本への投資の成果はそれほど良いものではありませんでした。日本株をみても90年代初めのバブルの崩壊からは立ち直りましたが、しかし、かつてのような勢いは戻らなかったのです。日本市場がアメリカ、ヨーロッパと並ぶ一大金融市場だった時代に戻るのではないかと、世界の投資家達が注目した時期があるんですがそうはならなかった。そうはならなかったにも関わらず、日本に興味を持っているのはなぜか、というと、やっぱり日本が好き人が多いのです。すなわち日本株をやっていれば、一年に一回か二回くらいは仕事にかこつけて日本に来る機会があつて、日本の歴史的遺産を見ることができまして、何と言つても日本のおいしい食べ物を食べられるということなのだと思います。

APECも来年は日本で一連の会議があるのですが、かなり多くの方が日本は食べ物おいしいから行くのが楽しみだと今から言っています。こうした文化的な魅力というのを育ててうまくアピールしていったら良いと思います。

最後に、少し恥ずかしいのですがせっかくこういう機会をいただきましたので、私自身の話をさせていただきたいと思います。先ほどご紹介いただいた通り、私の祖先は江戸時代まで代々吉備津彦神社の社家をしておりました。明治維新の時に、中央政府から全ての神社に役人を派遣して管理するということになったと聞いています。その際、下

っ端でよければ雇い続けてやると言われたようですが、私どもの先祖はそれに潔しとせず辞めてしまって、その後、かなり厳しい時代があったようですが、祖父が、昔屋敷が建っていた土地を買い戻しました。そして父は大学から東京に出てきました。

若いころは私にとっての岡山との絆というのは薄かったのですが、それでもいくつかの縁がありました。1つは、私の父方の伯母が嫁いだ先が、岡山市の郊外の昔から続いているお医者さんでした。90代になるまで開業医をずっとやっていたのですが、彼のところに時々遊びに行き、古いご自宅を見せていただいたり、趣味で収集している備前焼を見せていただきながら様々な話をお伺いしたりしました。この伯父は、とても教養のある人で、私は大好きでした。

もう一つの絆は、吉備津彦神社です。もちろん今でもずっとお世話になっています。その裏の山、吉備の中山と呼ばれていますが、その上の方に先祖代々の墓所があります。そして代々我が家に伝わっている古文書がひとがかえありまして、これをきちっと痛まないように保存していかなければならないということも私の役目です。それからもう1つ、少年団があります、吉備津彦神社に向かって左側に先祖が代々住んでいた土地があります。そこには昔屋敷が立っていて、一時期一宮役場として使われていたようです。その後空き地になり、現在大藤内広場といわれていますが、その隅のほうに何十年か前に建てられた建物があります。この建物は先祖とは関係がなく、祖父が買い残した部分を父が買い戻す際に上物として一緒に買い取ったものです。そこをFOS少年団のクラブハウスとして使っています。ご存知の方も多と思いますけれども、FOSというのは、かつて岡山県で国体が開かれた際に岡山各地に作られた少年団です。中山地区にもそれが作られ、その拠点として、この建物を使いたいとのご要望がありましたので、どうぞ、ということで無償でお貸ししております。ただ、こうした地域的な活動は、段々と衰退してきて、岡山市で残っているのはここだけと聞いています。クラブハウスの存在が多少でも団の存続に寄与しているとすれば、嬉しいと思っています。なお、この少年団は時々、吉備津彦神社の清掃などもされていると聞いています。若狭先生にご指導いただく機会は吉備津彦神社の行事に参加する中で生まれたということでございます。

ここで話題を変えて、ソーシャル・キャピタルという概念と私の出会いについてもお話をさせていただきたいと思えます。平成12年ごろ、たまたま海外の人から話がありまして、OECD（経済発展協力機構）とカナダ政府共催で面白い会議をやるが、アジアからの参加者がいない、日本の経験について話してくれないか。と言われました。じゃあ行きましょうというわけでカナダまで出掛けて行ったのです。私にとって印象深いのは、それが契機になって、平成13年にコロンビアでのシンポジウムに参加したことです。ある日突然、コロンビアの貿易大臣とおっしゃる女性の方から役所にEメールが飛び込んできました。コロンビアで開くシンポジウムに出てソーシャル・キャピタルの重要性を日本の経験も踏まえて話をしないか。という要請でした。そこで、コロンビアという国について私なりに調べてみました。当時コロンビアというのは大変な国でした。天然資源には恵まれていてとても良い国なのですが社会の中が割れてしまっていた。麻薬を作って収入にしているようなグループがあって、それが非常に大きくなってしまった。その頃現地では誘拐事件が多発していました。行くべきか、行かざるべきか考えたのですが、まあせっかく声がかかったので行ってみよう。ということで思い切って行きました。そのシンポジウムに参加したスウェーデンの人が言っていたことが逆説的でいまでも印象に残っています。すなわち、これだけ多くの人が非合法活動に従事してしまうと、それを止めさせようと禁止するだけでは無理で、彼らの生業を確保してあげなければならない。といっても簡単に新しい産業は育たないから、結局は軍隊や警察で雇わなければいけないのではないかと、言っておりました。このシンポジウムで、私は社会がきちんと機能していることがいかに重要であるかをお話したのです。自分ではどうしようもない要因、例えば治安とか郵便物の行方不明などの要因によって、事業が円滑にいかないことが多いような社会では、優秀な人はこの国を捨てて、先進国に行った方がのびのびと仕事ができるようになります。すなわち、ソーシャル・キャピタルが整っている国へ行って自分の力で仕事をするようになります。そういう優秀な人がぬけてしまうと、残された社会の機能はますます低下することになってしまいます。

レジュメの次のところに、やや大げさなことを書いてありますが、仕事の関係で5年くらい前から日本の代表として経済関係の国際会議に出ることが多くなりました、そこで日本の望ましいイメージはどういうものかということをお私なりに考えるようになりました。従来の日本のイメージは、ODAのお金を出してあげるとか、先進国としていろいろ教えてあげようというよう、印象があったと思うのですが、そういうものを前面にだすべきではないのではないかと、思うようになりました。そのようなものよりも、自然との共生の伝統とか、武士道的な精神とか、文化の豊かさとか、それからさっきソーシャル・キャピタルの話に出てきましたけどチームワークの精神とか、そういったものをもっと全面に打ち出していた方が世界に貢献できるし、良い印象も持たれるのではないかと思います。このことは冒頭申し上げた「時代の変わり目」の中で世界が模索している問題の答えとつながっているように思います。また、アジ

アの風土に根ざしたものであると思っています。後2、3分で私のお話は終わらせていただきますので、その後でこの点についてぜひ皆様と意見交換をさせていただきたいと思います。

レジュメには書いておりませんが、私もそれなりに齢をとってきました。若いころは、歴史はそう好きではなかったのですが、段々と、先祖は一体どういう生活をしていただろうか、自然とはどういう関わりを持っていたのだろうかといったことについて知りたいという気持ちが強くなりました。これは単なる知的興味というよりは、本能的な意識のように思います。

たまたま昨年、ふるさと納税という新しい制度ができましたので、新しい制度を自分でも体験してみたいと思って岡山市に納税をしました。それがきっかけとなって、岡山市役所の方と、かなり縁ができてきました。先ほどの少年団の方々や今回の研究会も含めて、岡山との関係も一層深まってきました。今後ともぜひ、この研究会に参加して、先祖が連綿とかかわってきたこの地域の歴史の解明にささやかながら貢献したいと思っています。非常に雑駁なとりとめのない話で恐縮しておりますが、地域、そして歴史について考えることはこれからの世界の大きな流れの方向と何らかの関わりがあるように思っております。そして、そのことが、日本がアジアや世界の中で貢献していく上での一つの立つ位置となっていくのではないかと考えていることを最後に申し上げて、つたないスピーチを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



大守氏 講演



熊山遺跡を見学